



一生の宝



川崎ゆきお

「若い頃にいい思い出があり、一生その思い出を思い出しながら生きている。という人はいるのでしょうか」

「はあ、何の話ですか」

「一生分ほどあるようないい思い出をしたとか」

「しましたか」

「しない」

「はい」

「昔のいい思い出を胸に生きてきた……でもいいです」

「同じような意味ですねえ」

「あなた、あります」

「ありません。いろいろいい思い出はありますが、たまに思い出す程度ですねえ。もう二度と体験できないのなら、仕方がないですから」

「じゃ、これから新しい思い出を作るわけですね」

「いやいや、それは結果で。思い出を作るために何かをやるわけじゃありません」

「過去の遺産を食べて暮らす。これはどうですか」

「そんな遺産はありません」

「ああ、はい。話が続きませんなあ」

「きっとそんなことはないのでしょうか」

「昔の、いい思い出を胸に、生きて来れた……という話ですか」

「そうです」

「そんないい思い出などないし、過去の遺産もないです」

「そんなこと、あまり考えないんじゃないですか。過去は振り返りますが、終わったことですからね。だから、もう仕方がない。手が届かないですから」

「再現できないと」

「そうです。だから、あまり役には立ちませんよ。まあ、思い出したときは、少しは懐かしがれますがね。しかし、ずっとじゃない」

「昔はできて今はできない。だから、役に立たないという意味ですね」

「まあ、思い出なんてそんなものですよ」

「心の支えになっているとかも」

「よく聞きますが、それは現実にあるのでしょうか」

「あるんでしょ」

「誰かから聞きましたか」

「いや、聞きません」

「ほう」

「自慢話はよく聞きますが、それが支えになっているとは、思えませんねえ。逆に足を引っ張っているように」

「過去の栄光に囚われて、ですね」

「栄光がある人ならいいですが、私なんて、そんなものはない」

「はい」

「要するに言い過ぎじゃないかと思うんだね」

「そうなんですか」

「そんな心根の人などに合ったこともない」

「いや、私達が知らない人の中にもいるかもしれませんよ」

「過去のいやな思いは、たくさんありますよ。しかし、いいことは少ない。だから、あまり影響はない」

「さあ、それは聞いても答えないかもしれません。いい思いをしたことを」

「ほう」

「誰かに話す汚れるので、話さない」

「なるほど」

「墓場まで持って行く話です」

「悪い話じゃなく」

「そうです」

「あなた、ありますか？」

「先ほども言ったように、ありません」

「私もだ」

了